



頭の刺激

あけましておめでとう…とはいっても、受験生の君たちにとっては「僕たちの正月は3月だ！」(かつての代ゼミのスローガン)といったところだろう。私は、年末・年始は、その準備が面倒になってきた母(と実家の家族)と一緒に、旅行先で迎えることがここ数年続いていて、去年はたまたま母の兄(私の伯父)の喪中ということで出かけなかったのだが、今年はそのリベンジということで、安芸の宮島に出かけてきた。神様に詣でることも目的だが、お好み焼きや穴子飯、焼きガキ、瀬戸内レモン蕎麦などを賞味するのももう一つの目的で、その楽しみも十分に堪能してきた。同時に、平和祈念公園にも出かけ、被爆者の前に祈りを捧げながら、改めて平和の意義を噛みしめてきた。

さて、帰宅後、年頭の読書に臨んだが、それがまあスゴイ本であった。あまりのすごさに主人にも紹介してウケタので、君たちにも頭の刺激用に紹介しよう。ミシェル・フーコーの『狂気の歴史』(新潮社)である。訳者は田村俣(たむらはじめ)さんという人だが、略歴が載っていないので、どういう人なのか今一つははっきりしない。まあ、とにかくこの本の冒頭部分(序言)を引用してみる。

*

パスカルによると、「人間が狂気じみているのは必然的であるので、狂気じみしていないことも、別種の狂気の傾向からいうと、やはり狂気じみていることになるだろう」。またドストエフスキーには『作家の日記』のなかに、「隣人を監禁してみても、人間は自分がちゃんと良識をもっているという確信をもてない」という文章がある。

この別種の狂気の傾向について歴史を書く必要があるのである——その傾向によって、人間は隣人を監禁する最高権威たる理性のはたらきを通して伝達し、非狂気の無情な言語を介して認知しあう。しかも、理性のこの陰謀が、真理の支配のなかで決定的に完了してしまわないうちに、抒情中心の抗議の声によって息をふきかえさないうちに、この陰謀の契機を発見しなおす必要がある。狂気の歴史の零度を、つまり狂気が未分化の経験であり、分割したいによってまだ分割されない経験である、あの零度を、歴史のなかに発見しなおす必要がある。(以下略)

*

何のコンテクストもない冒頭で、いきなりコレである(写し間違いはない!)。やれやれ…。パスカルの言葉は分からないでもないが、ドストエフスキーは何が言いたい? 隣人は狂人だから、理性ある自分はその人を監禁してみたのだが、それでも自分の非狂人性に確信が持てないということか? 「零度」というのは、構造主義の専門用語みたいなものだから、まあ何とか分かるのだが…。

原文が悪いのか、訳文が悪いのか(笑)? 大学の第二外国語でフランス語を選択する予定の諸君は、ぜひ名著(しかし難解)といわれるフーコーの原文に挑戦してほしい。

今はセンター試験の勉強が中心だろうが、記述式の問題で論理を展開させる練習をしておくことも、脳の硬直化を防ぐ上では有効である。新聞を声を出して読むなんてのも、案外脳ミソのイイ刺激になる。朝起きたら、まずは新聞に目を通してみたらどうだろう。